

私は今回の企業訪問で、順天堂大学に勤めており、天皇陛下の執刀医として有名な天野篤教授と、仙台厚生病院に勤めており、国境なき医師団の医師として活躍している池田知也先生のお話を伺いました。

私は今、将来にどのような道に進みたいのか迷っていますが、今回の二人の医師のお話を伺い医師の仕事の素晴らしさ、また過酷さを知ることができ、将来どのような道に進みたいのか、手掛かりを得ることができました。

天野教授は、約 15 分という短い時間でしたがお話をうかがうことができました。天野教授は現在順天堂大学に勤めている心臓外科医の方で、以前は関東通信病院ほか、民間病院で勤務しており、今までに執刀した手術は 7200 例を超し、98%という極めて高い成功率を誇っています。1200 年には、天皇陛下の心臓バイパス手術行っているほど、素晴らしい技術を持っています。

天野教授は、父が心臓病を煩い「自分で父の心臓病を治したい」と思ったことが心臓外科医のを目指した理由だそうです。日本大学医学部に入るまでに三浪しており、心が折れそうなこともたくさんあったそうです。天野教授はそんなときでも「まず机に向かう」ということを意識し心が折れそうな時でも、まず行動に移すこと、諦めないことを大切にしておっしゃっていました。天野教授に、今までの長い医師としての人生の中で手術に失敗して、患者さんの命を失ってしまった時は、どのように立ち直っているのかを伺うと、手術をしている最中に患者さんが亡くなることはないそうです。私たちがイメージしている手術と、実際の手術は異なる点がたくさんあり、現在の医療器具が揃っていれば、手術中の失敗でそのまま、患者さんが亡くなってしまうようなことはほとんどないそうです。また、天野教授には 7200 例という手術の経験があります。なので、手術中は緊張しないそうです。天皇陛下の心臓バイパス手術をした時も、「いつも通りにやればいい」と思い、緊張はしなかったそうです。

そんな天野教授にも、自分が担当している患者さんが処置が遅れたことや、治すことができない病気で最終的に亡くなってしまふ患者さんがいました。医師として患者さんを救うことができなかったことへのストレスに加え、ときに患者さんの家族から受けるバッシングもあり立ち直れなくなりそうになることもあるそうです。天野教授はそのようなことも、すべて医師という職業の特徴であり、医師としての耐えなければならないことだとおっしゃっていました。

最後に天野教授は、今のうちからやっておくべきこと、大人になってからやるべきことを話して頂きました。今のうちからやっておくべきことは英語とパソコンを使いこなせるようになることです。今はグローバル化が急速に進んでおり、医師をしていても英語でコミュニケーションをとることや、英語の医学書などを読む機会が非常に多いそうです。また、パソコンを使いこなせるようにすることは学会など自分の意見や成果を発表するときに必要なパワーポイントや、多くの情報をまとめるために将来必要になるとおっしゃっていました。大人になってからやるべきことは、仲間を大切にすることだそうです。手術は助手や看護師、麻酔科などチームで行います。そういった人たちと過ごす時間は家族と過ごす時間よりも長いそうです。チームの人たちがお互いを大切にして、お互いを思いやることは手術の結果にも影響するそうです。人を思いやり、思いやることは「プラスの連鎖」を呼んでくれると、天野教授の本「あきらめない心」にも著されています。人の命を守るという仕事でそういった心がけはやはり大切なものだと思います。

次に、仙台厚生病院に勤める一方で、国境なき医師団の医師として活躍されている池田知也先生についてです。池田先生は仙台第二高等学校の卒業生です。池田先生が医師を目指そうと思

ったきっかけは、高校生の頃の文化祭で国境なき医師団の医師の方から「紛争地域では、自分が眠ったら、何人もの人が死んでしまっている」という話に衝撃を受け医師を目指そうと思ったそうです。先生が今までに受けたミッションはイエメンへの派遣でした。イエメンは、活動する環境には非常に恵まれていましたが、特に紛争が多い地域で病院の近くでは空爆の音が聞こえ、地下室に避難するということがあったそうです。そんな危険な紛争地で活動でしたが、始めてミッションが始まったときは高校生の頃から夢見ていたことが叶えられて感動したとおっしゃっていました。

国境なき医師団とは医師のみで構成されている組織だと思われがちですが、実際は組織の半分ほどが医師ですが、それ以外はジャーナリストやロジステーションという人たちで構成されています。ロジステーションは、衛生管理や手術できる環境を作ることなどが仕事です。なので現地の病院はロジステーションに管理されていたそうです、国によってはテントしかないような所もあるそうです。

私たちは池田先生に「運ばれてきた患者が過激組織の人間で何人もの人を殺してきた人でも、立場上助けなくてはならないという気持ちはどういったものなんですか」という質問をした際、池田先生は、もし自分がその患者を助けないと、池田先生たちは逆に過激組織の恨みを買って危険な目遣うことになるから、そのようなことを考えないようにしているとおっしゃっていました。だから、国境なき医師団は武器を持たないそうです。もし、私がそのような立場なら助けたくなくなると思います。危険な紛争地帯にいつまで人助けをしているのに、人を殺している人を助けたいと思うことはできないとおもいました。ただ、実際に国境なき医師団としてそういった人を助けなくてはならないということも、気持ち的に大変ことだと思いました。

池田先生にとって一人前の医師とは「与えられた環境で、その人にとって最善のことができること」だそうです。国境なき医師団活動でも様々な環境で行動しなくてはならない中、最善のことはとても難しいことだと思います。池田先生は、本番ですぐに行動出来るようにするためにイメージトレーニングをすることが大切だそうです。

池田先生は、今まで医師となり国境なき医師団で活躍するまでにいろんな苦労があったと思いますが「目標を叶えるまでブレないこと」が大切だとおっしゃっていました。

私は今回、心臓外科医として最前線で働く天野教授と、国境なき医師団として日本とは全く異なる環境で働く池田先生、という同じ医師でも全く違った人生を歩んだ医師のお話を伺いました。今まで医師といたら天野教授のような病気の患者を治す職種というイメージが強かったのですが、池田先生の話をお伺い医師の中にもたくさんの道があることを実感しました。私は今回の経験で、自分が今まで本当に小さな世界にその中で将来の夢を決めようとしていたことに気が付きました。私たちは、もっと世界のことをよく知り、将来の夢をもっと具体的に決めていくべきだと感じました。自分が今なにをしたいのか、どのようなことが向いているのか、もう一度よく考え、具体的な将来の夢を見つけられるように自分の世界を広げていきたいです。